

2013-1-1 イヌの脳

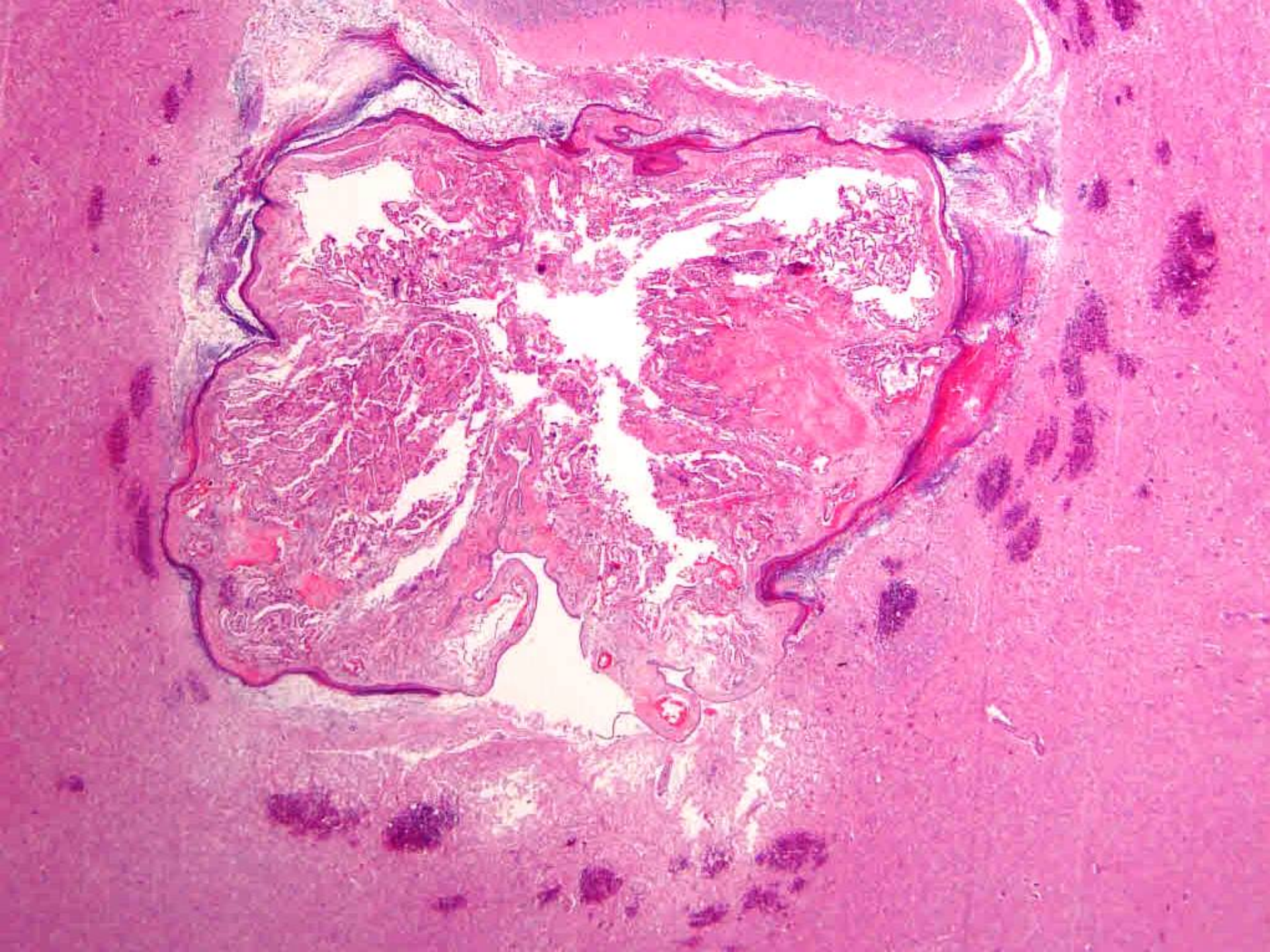
提出機関: Diagnostic Services Unit
University of Calgary Veterinary Medicine

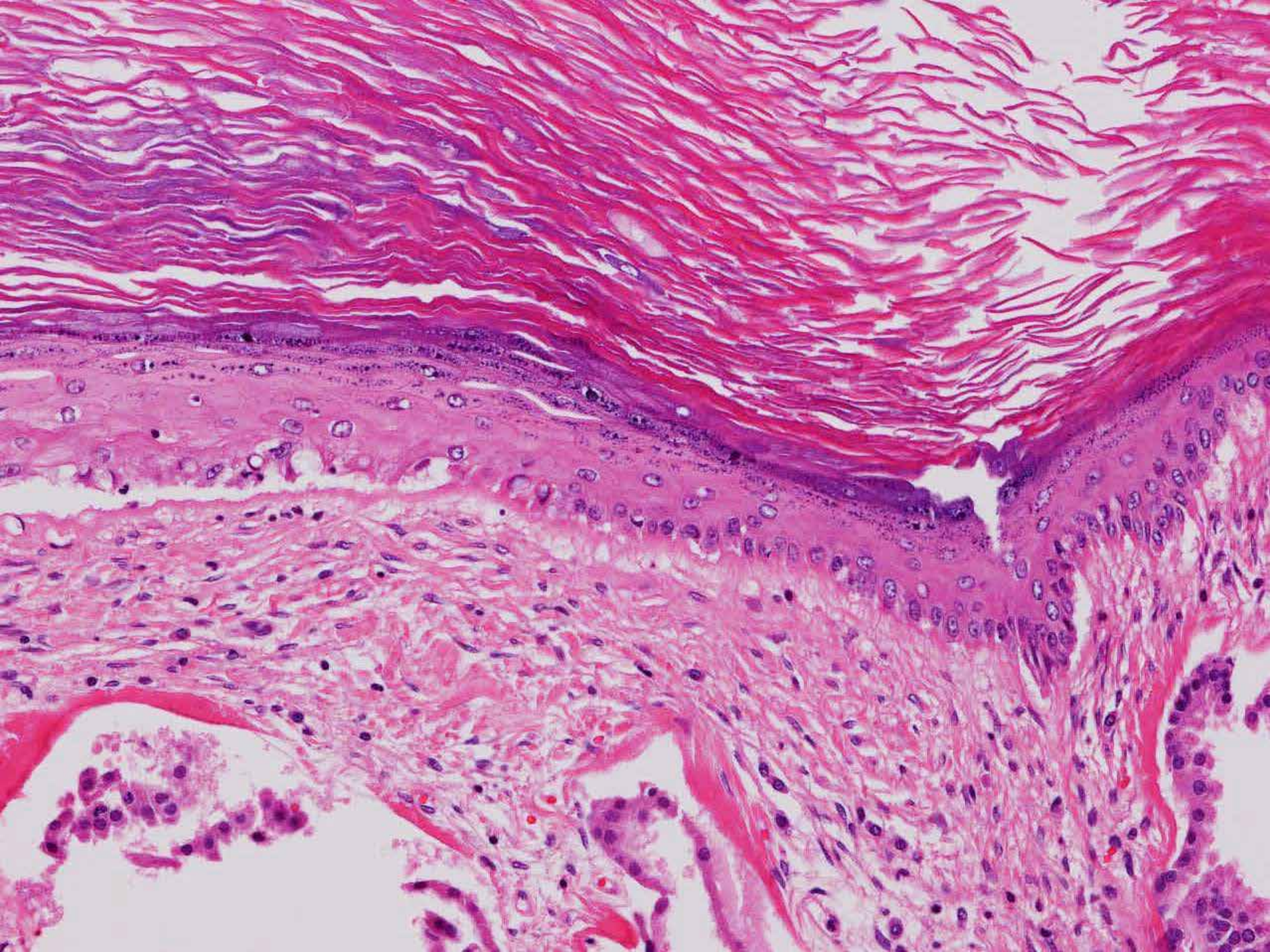
症 例: イヌ(ラブラドル・レトリバー交雑種) 3歳齡 オス

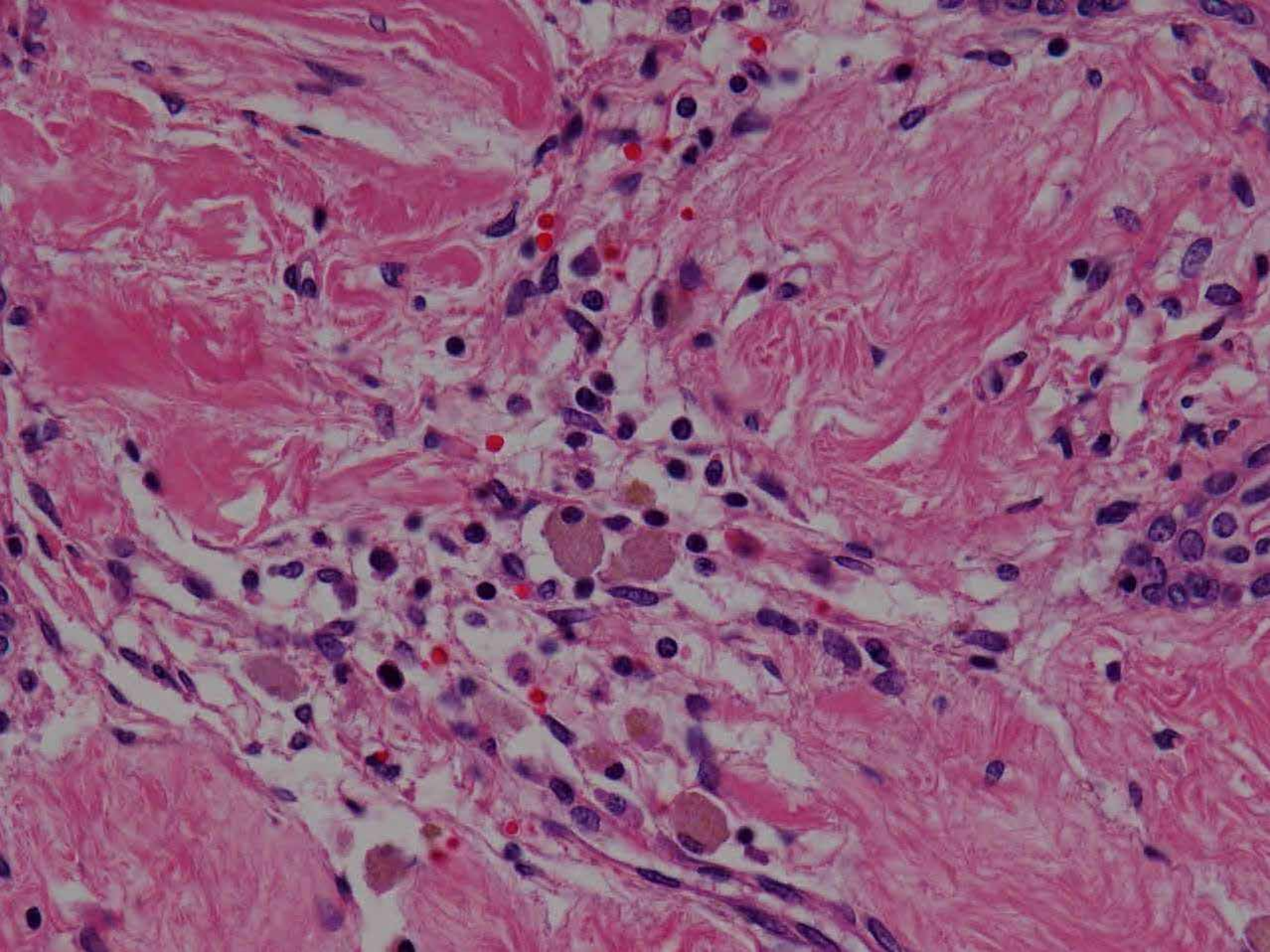
病 歴: 食欲不振、異常行動、運動失調、転倒、遠吠え、失禁、腰背部疼痛にて受診。四肢の硬直、大量流涎、後弓反張、眼振といった急性進行性の臨床徴候を示し入院。ペントバルビタール投与後、音、接触に無反応となり翌朝死亡しているのを発見。大きな外傷はみられなかった。

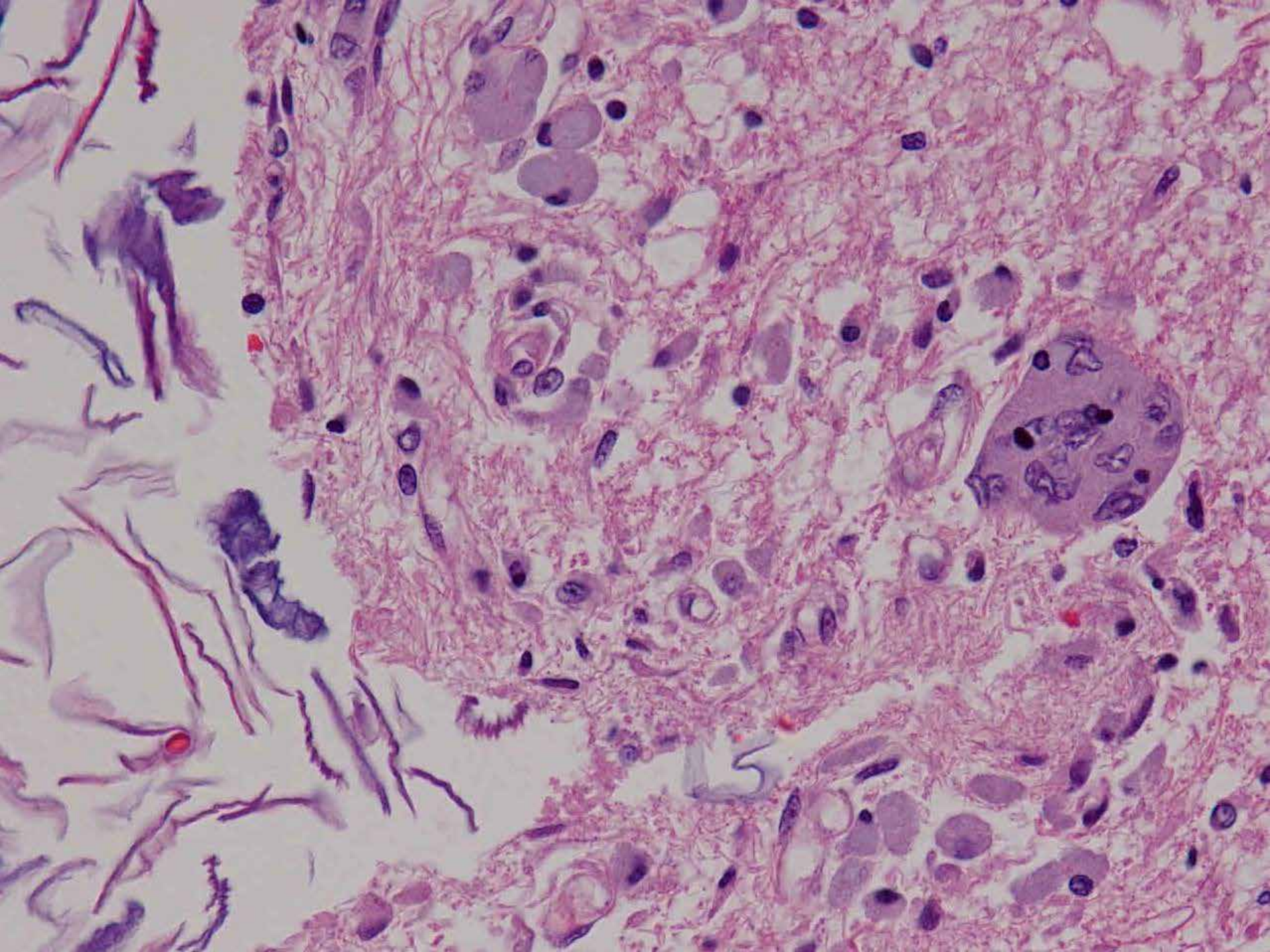
肉眼所見: 中脳水道と第四脳室最前部が著明に拡張、側脳室は中等度に拡張。0.8cmの不整形、膨張性、硬性、乳白色の腫瘍が第四脳室腔を閉塞。周辺の小脳及び脳幹に多中心性の出血。

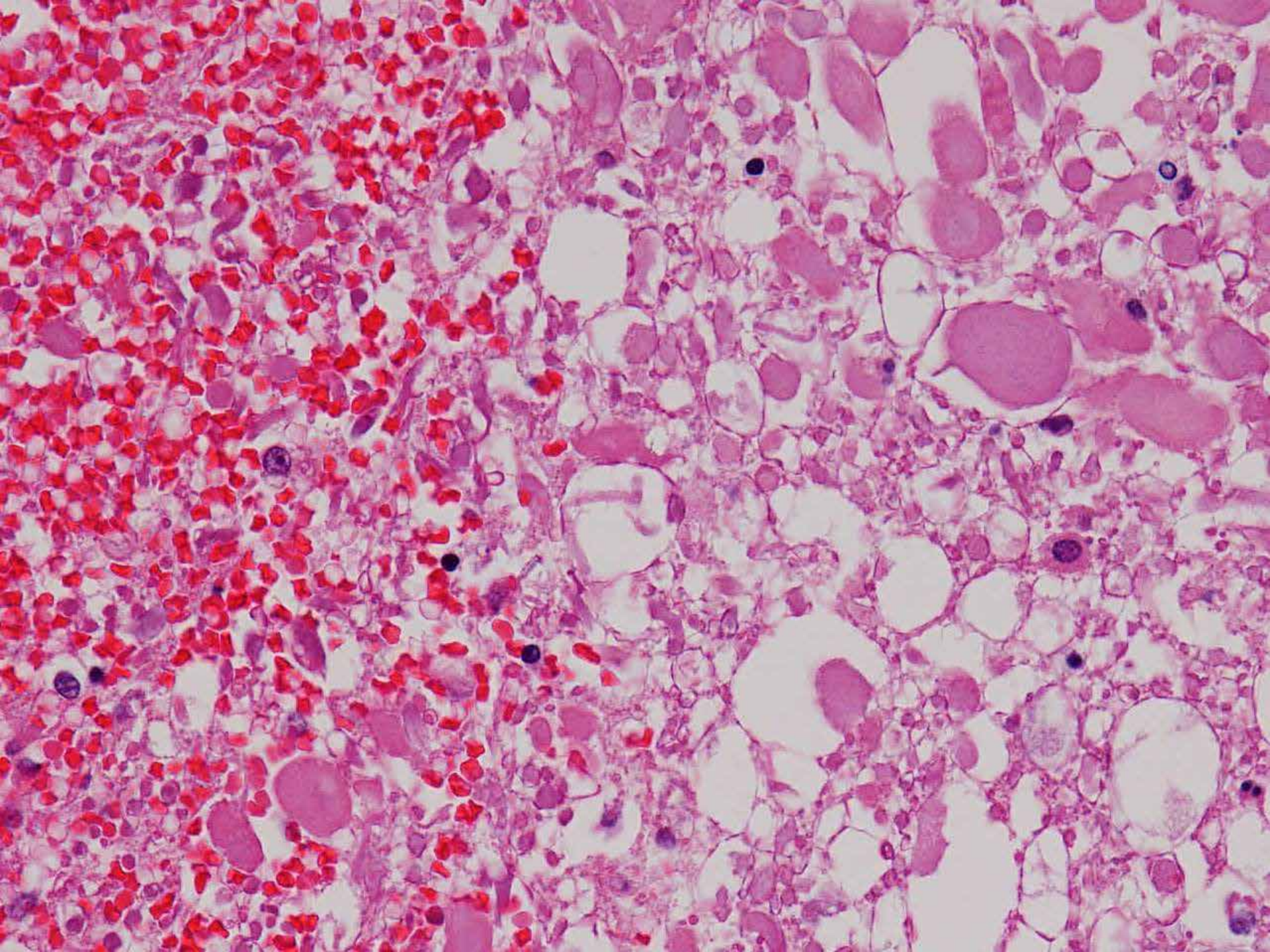












提出者の診断

脳、第四脳室：

類表皮嚢胞。出血、軟化及び後天性閉塞性水頭症を伴う。

Brain, fourth ventricle:

Epidermoid cyst with hemorrhage, malacia, and acquired obstructive hydrocephalus.

JPCの診断

脳、第四脳室：

類表皮嚢胞。肉芽腫性菱脳炎、脳軟化、浮腫及び出血を伴う。

Brain, 4th ventricle:

Epidermoid cyst with granulomatous rhombencephalitis, encephalomalacia, edema and hemorrhage.

提出者のコメント

- : 中枢神経系の類表皮嚢胞について
- : 臨床症状について
- : 鑑別診断について

: 中枢神経系のEpidermoid cyst (類表皮嚢胞) について

中枢神経系の類表皮嚢胞は神経外胚葉が神経管を形成する際の皮膚外胚葉が迷入により発生する。

ヒトでは頭蓋内の類表皮嚢胞は頭蓋内に発生する腫瘍の1.8%を占める。

イヌ、ウマ、マウスおよびラットで少数報告がある。

イヌでは類表皮嚢胞は頭蓋腔内と椎管内で報告があり、頭蓋内が最も一般的である。

好発犬種、性別は明らかでないが、3ヶ月から8歳齢に発症し、若齢犬(2歳齢以下)に多い。

:臨床症状について

頭蓋内類表皮嚢胞は緩徐に成長し、ヒトでは典型的には高齡まで症状を示さない。

嚢胞は角質のはく離と集積により膨大性の成長様式を示す。

嚢胞による隣接構造の圧迫は神経学的障害を、脳脊髄液の閉塞は水頭症を起こし得る。

イヌでは第四脳室から小脳橋角部で報告されており、前庭症状、小脳症状に關与する。

ヒトで化学性髄膜炎や稀に扁平上皮癌への悪性化の報告がある。

イヌでは悪性化は報告されておらず、本症例も扁平上皮癌を示す組織像はみられなかった。

: 類症鑑別について

頭蓋内の類表皮嚢胞の病理学的特徴は、皮膚に発生するものと同様である

頭蓋内の類皮嚢胞dermoid cystも報告があり、発生機序も類表皮嚢胞と同様である。

類皮嚢胞は皮膚付属器(毛包、皮脂腺、汗腺)をもつ点で類表皮嚢胞と鑑別できる。

本症例で皮膚付属器は観察されず、類表皮嚢胞と診断する。

会議のコメント

神経学的機能障害は一般に隣接する神経構造の圧迫に起因し、本症例では軸索の変性と多数のスフェロイドが特徴病変の一つである。嚢胞の破裂に続いて起こる炎症(人医領域での化学性髄膜脳炎)もまた、この臨床徴候の一因となる。

頭蓋内の類表皮嚢胞がより一般的であるが、脊椎内及び脊髄内の脊髄嚢胞もイヌで述べられている。

類皮嚢胞も類表皮嚢胞と同様な発生学上の起源をもつが、前者はより多能性の前駆細胞に由来し、しばしば皮膚付属器の構造を形成する。頭蓋内の類表皮嚢胞はマウスやラットでは一般に臨床徴候がなく、嚢胞がそれほど成長しないことを示す。

ハムスターやネコでは中枢神経系の類表皮嚢胞の報告はない。